

ひて、夕日の浪間に沈みゆくを忘るゝ時も、わが聲をきゝては、集めし石をうちちて、背にせる稚子まで笑顔つくりてかけよるは御身等の常であつた。一年一度の盆躍り、明日からこの浴衣きてと新らしさをほこる時も、やめよ躍るなよとのわが一言にて、おとなしく服従して、思ひきりたるは御身等のエライところである。浪のしはぶさに裳ぬるゝ巖の上にまどゐりて、わが拙き話をさくときも、蕨とる野邊に蹲りてわが命ずるまゝ、暗誦を雲雀の如く囀る時も、曇りなき心月は形骸の外に輝きて、吾はひそかに御身等の従順の徳を敬ひたること幾度であつたらふ。教へしもの、學藝は言ふに足らず、習ひしものとして、ものゝ用には立ち得なかつたらふが、かの數年間に、吾等の間に咲きはこりたる友愛の花、御佛のさげものとして露恥かしきことはないと思ふ。

のこれる教へ子と御身の先生に、これよりのちいつまで學びつゝいくること出来るだらふか。いつまたかの松林に迎へらるゝことであらふか。御身の運命と同じくわが運命も前途は暗黒である。よし

やこの國にながくといまりて、金髪の教へ子、碧眼の友と修養を共にすることありとも、わが心には御身等のまごゝる常にやどり居るものを、吾はた何をか恨みとせん。くれどもくれども盡さぬくりごとを、書きて悲しみていつまでたつとも要なきこと、さらば、ずん子よ。異國の花は窓のもとにうちえめど、秋にも似たるわが心、御佛の外誰れにか語るべき、(八月十一日)

名士の家庭

太田 龍 東

戸水法學博士の家庭

予常に人に語るに、日露戦争に依りて天下に名を擧げたるもの三名あるを以てす。即ち一は東郷大將、二は小村男、而して他の一は戸水博士是れなり。前二者は戦争に大關係ある軍人及び外務大臣なれば、戦争の結果名を博するは敢て不思議なけれど、學者たる博士が之れが爲め全國至る所知らざる者なきに至りしは、蓋し英傑にあらずして何ぞ。而してこの一代の名士を出したる家庭が抑も如何なるものなるかを知るは、家庭の實際に當られる諸婦人には最も有益なることと思ふを以て、左に少しく之を説かんと欲す。

博士の略歴

博士名を寛人と云ひ、文久元年を以て加賀の金澤に生る。家世々儒學を以て傳はり、嚴父信義氏は、加賀侯の國老（今の本多男爵）に儒を以て事へたりき。博士は八人の兄弟中なる長男にして幼より父に漢學を學び、規律正しき學を受くること十二年、それより學校の寄宿舎に入られき。而して、法科大學を卒業されしは年方に二十五の時にして、間もなく留學を命ぜられ海外に在ること六年に亘りぬ。その修めし學科は或は法律、或は政治、或は哲學或は語學、と云へる如く、學科数の多きこと實に驚くばかりにして。博士が今日博學の稱あるは所以あることなり。

博士は帝國大學に奉職さるゝ外、日本大學の理事として多大の力をそゝぎ給へり。日本大學長は松岡廣毅氏なるも、殆んど有名無實に近く、事實上の學長は全く博士に存す。日本大學が今日法律學校として朝日の如き盛況を呈し、且つ好評を博するに至りしは博士の力によると云ふも過言にあらざるなり。博士は斯の如く一學者として、又經營家として、大手腕あるのみならず、又英傑として立派な性格を有せらるゝ人なり。

住宅

幾多の英魂を祭れる九段の中坂を、眞直に飯田河岸に突き當り左に行くこと三四軒にして、薄黒き長屋門に「戸水」とへる標札のあるを見る。是れ即ち博士の住宅なり。家は日本風にして、大ならずと雖も閑雅に、麗ならずと雖も清爽に、一見豪家の隱宅然たり客間は八疊にして、二三の古き額面はこの室の雅趣を添ふ。博士は有名なる讀書家なれば、和漢洋の珍書を集むること多く、丸書に

着する外國書の最高購求者は、博士及び故星亨氏と云へる程にしてその書籍藏及び居室の如きは宛然圖書館に異ならず。家族はいと少數にて、博士夫人及び一男の三人に二人の下女あるのみなり。嚴父は根岸前田侯爵家にありて、専ら編輯の任に當れりと云ふ。

博士の家庭

まづ夫人のことより述べんに、夫人は臙子として博士より十歳若く即ち今年三十五歳にして、加賀國大聖寺の生れなりき。普通學は元の東京高等女學校に修められ、今の石本陸軍中將の夫人と同窓友なりと云ふ。博士は家事上のことには關係せられざるを以て夫人一人にて之れを司り、炊事掃除を下女に爲さしむる外、他は悉く自らさるるなん。常に儉素にして奢侈ならず、家計その度を得て一家を調和するに妙を得られしもの、如し。凡そ婦人は學識の高からんよりは、夫をよく扶け子女を教育し、以て圓滿なる家庭を作らんことを望ましけれ。之れ所謂良妻賢母なるものにして今の女學生上りが少しの學問を鼻にかけ、女權を振り廻はすか如きは一家の主婦として完全ならざるのみならず、一般婦女としての美徳を失へるものと云ふべし。而して予は茲に博士の夫人を以て婦人の模範なりとは謂はざるも、少なくとも一家の主婦として非難すべき餘地なきを疑はざるなり。夫人は他の婦人の如く何々會長或は何々幹事と云へるが如く、形式上の名利を貪ぼること好まず、専ら實質を重んじらるゝものに似たり。

博士に一子あり。その名を元はじめ（十七歳）と云ひて、今年東京府第一中學校を卒業し、第一高等學校英法科へ入學されき。博士は元氏

の法學を志望せらるゝに就き左の如く述べられたり。元來人の學問するや、その人によりて學科を撰定せざる可らず。我子の能力如何をも顧みず、親の權力を以て何々を研究せよと云ふが如きは恰も茄子に南瓜を實らせんとするが如く、到底得て望む可らず、

故に予は余の子息の目的に就きては本人の自由任せ少しの干渉をなまず、然れども強いて希望を謂へば、政治學を研究させたまものなり云々一と。如何にも博士の性質よりせば、法律家よりも政治家を希望さるゝば當然なり博士がその希望を強制せずして本人の自由に任せらるゝは最も當を得たるものと云ふべし。元來博士は剛情にして、一旦自己の思ひ立ちしことは是非遂行せざれば止まざることは、吾人の屢々耳にせる所にして、之れを日本大學の執務の凡へて頗る、專制的なるに徴するも其一端を知るに足らん然るに博士がその子を教育さるゝに當りて、かく寛大なる自由を與へらるゝに至りしは、蓋し博士自身が經驗より、生ぜしものにあらざるか。

この元氏は博士に似て餘程の讀書好きなるよし、こは博士が終日讀書さるゝ感化を受しならんも、幾分か遺傳の然らしむる所たらずんばあらず。戸水家は世々子なきを以て養子せるが例なるも博士に至りて初めてこの例を破り、實子として父の相續を爲すに至り、又元氏之れを續くべくなりしと云ふ。博士の教養法は放任的にして細事には少しも干渉せず、その大體に於て注意せらるゝが如く、夫人亦同方針なるに似たり。殊に博士は自然の愛を尊重し、常に子に對しては勿論、夫人召使又は他人に對してもこれを主とせり。故に家庭間を互に於て自然の愛は充満され、その團

樂の樂しき家庭は實に人目にもうらやむばかりなり。世には外部にこそ平和に見ゆれ、その内面に入れば風波の絶ゆる事なく悲痛を極むる家庭なきにあらざると雖も、博士の家庭はこの點に於て確かに模範とするものなり。

而して茲に注意すべきは、學校生活のみにて家庭生活を知らざる博士と嚴格なる家庭に養育されし夫人との二人が、家庭を作つて子を養育することこれなり。この二分子によりて養育されし元氏は、果して如何なる性格の人となる可きか。予は活目してその成果を見んと欲す。

博士の母堂は昨年黄泉の客となられしが嚴父信義氏は今年六十八歳にして博士と居を異にするを以て厭、訪問慰安し、孝養至らざるなしと、博士の兄弟中六人婦人は、皆それ〴〵良縁に就かれしが、博士の次なるは夫死亡せるを以て今は専ら嚴父の孝養に日を送り、他の兄弟中の二妹亦過ぎし戦に何れ少佐たる真人を失ひ給へりと云ふ。

